

コミュニティの生成と再編成  
——沖縄県宮古島西原の祭祀組織を事例に

平井 芽阿里

(日本学術振興会特別研究員〔PD〕：國學院大學大学院文学研究科)

2012年8月



京都大学グローバル COE

「親密圏と公共圏の再編成をめざすアジア拠点」

Global COE for Reconstruction of the Intimate and Public Spheres in 21st Century Asia

〒606-8501 京都市左京区吉田本町 京都大学大学院文学研究科

Email: [intimacy@socio.kyoto-u.ac.jp](mailto:intimacy@socio.kyoto-u.ac.jp) URL: <http://www.gcoe-intimacy.jp/>

## 1 はじめに—祭祀組織から考える

奄美、沖縄、宮古、八重山諸島を含む南西諸島の各地には「御嶽（うたき）」という神々の聖なる森が点在している。この聖なる森は時に神々が訪れる場として、時に神々が滞在する場として認識され、今も地域の人々によって手厚く守られている。御嶽は各村落に一カ所、あるいは複数存在し、御嶽を拠点として神々への各種儀礼が実践される。本稿では、このような村落単位で祀る神々に対する儀礼を「村落祭祀（そんらくさいし）」とし、村落祭祀の担い手を「神役（かみやく）」とする。

1980年代以降、南西諸島各地で担い手となる神役の不足、儀礼の簡略化や規模の縮小など、村落祭祀の衰退化や形骸化が指摘されている（比嘉 1987、大越 1986、笠原 1991、安部 2000 など）。この背景には、神役の減少や不足が密接に関わっており、神役が過疎化などによって不足しているという意味に限らず、神役に就任しながらも村落祭祀に参加しない者の存在も指摘されている（森田 1995:49）。また、たとえ地域に候補が複数いたとしても、神役への就任自体を拒否するような事例もある（平井 2007b:183-185）。神役の減少により、神役が所属する祭祀組織は解体したり、成員を組み替えるなどしている。

これまで祭祀組織は村落の神々を共同で祀り、村落の聖域を共同で管理し、村落祭祀を共同で担ってきた。それは、適齢を迎えた地域住民が言わば自動的に加入する地域集団でもあった。しかし、加入者の減少によって安定的な成員補給に支障が生じると、村落祭祀の維持や継続が次第に困難となる。従来の研究では、この要因を時代背景や経済構造、生産基盤や個々の価値観の変容に求め、近代化とともに「伝統的」な地域共同体の連帯が崩壊したことが繰り返し指摘されてきた（上原 2001、2004 など）。田中は、現代日本においては、近代化の過程で個人化が進行し、共同性の成立基盤そのものが大きく揺らいできたことと指摘している。そして本来、「共同性を安定的なものにする装置」ともいえる「むらの組織」を成立させるような「伝統的」な規定力はもはや弱体化し、それゆえ、共同体の規定に多元的な力が働いているとも述べている（田中 2010:74-78）。このような状況の中、祭祀組織が時に宗教的実践のためだけに存在するのではなく、「地域独自の知識体系の継承装置となっている社会関係を具現化する場や機会」として生成されるような事例もある（合田 2010:356）。

以上を踏まえ、本稿では沖縄県宮古島のある祭祀組織を一つのコミュニティとして捉えた上で、「コミュニティがどのように構成され、持続し、また変動するかといった側面」について論じる（田辺 2008:138）。具体的には、地域住民がコミュニティを維持するために何を選択し、何故それを選択したのか、何が変わり何が変わらないのか、について特にコミュニティに所属する個々人の実践に着目し生成と再編成の過程を記述する。それはデランティが指摘しているように、コミュニティは「象徴的な意味のレベルを超えて、想像され

る集団形成のレベルという付加的な次元に移行する」必要があると考えるためである（デランティ 2006：264）。

しかし、本稿では例えば「持続可能なコミュニティ」といったような、理想的なコミュニティの探求やモデルとしてのコミュニティを模索することを目的としてはいない。それは、祭祀組織が安定的な成員を確保することと、安定的に存続することとは、必ずしも同義とは言えないからである。むしろ時代変容とともに再編を繰り返しながら生成を繰り返す、不安定な集団として捉える視点が必要であると考え。即ち、現実のコミュニティを「生活者の〈いま〉と〈ここ〉に体験として生きられている意味的な生活世界」として捉えたい（大山 2001:10）。その上で、現代社会においてコミュニティが生成され再編成される過程を村落祭祀の変容と神役個々人の日常的実践および地域社会との関わりから考察することを目的とする<sup>2</sup>。

## 2 ナナムイとは

### 2.1.宮古島西原

本稿では、沖縄県宮古島の西原（にしはら）という地域を対象とする。宮古諸島は沖縄諸島より 300 kmほど南下した所に位置し、宮古島、池間島、伊良部島、大神島など大小 8 つの島からなる。西原は図 1 に示したように、島の北部、市街地から北へ 4 kmほど進んだ地点にある。人口は男性 494 人、女性 476 人、452 世帯の計 970 人であり、主にサトウキビ栽培などに従事し生活をしている<sup>3</sup>。

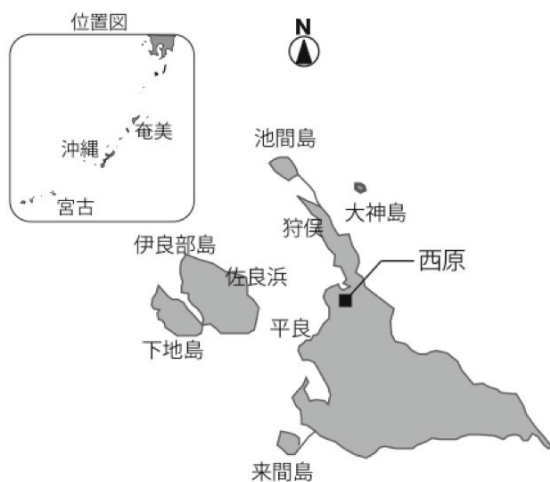


図 1 西原の所在地

西原は、1874 年に池間島からの人口増加による移住によって成立した集落である<sup>4</sup>。分村時には、池間島最大の聖地とされるウパルズ御嶽の神々を引き継ぐと共に、村落祭祀も継承した。

西原には 17 ヲ所の御嶽が住居を囲むように点在している。このうち、村落祭祀を行う御嶽は図 2 に示した 10 ヲ所である。池間島の神々を勧請した西原最大の聖地である①のウパルズ御嶽を中心とし、②ヤマト御嶽、③ナカマ御嶽、④サイヌハ御嶽、⑤ンマヌハ御嶽、⑥ユキダキ御嶽、⑦ウヅキ御嶽、⑧アガイジャー御嶽、⑨トゥクガンミ御嶽、⑩イーガマ御嶽となる。■のトユンナカマツとは、かつて村の番所があった旧公民館のことであり、施

設内外に複数の神を祀ることから聖地と認識されている。



図2 西原の御嶽所在地

## 2.2. 祭祀組織

西原の祭祀組織は「ナナムイ」という名称で呼ばれている。ナナムイとは、村落内の 10カ所の御嶽と旧公民館（トユンナカマツ）を中心として、年間 45 回以上の村落祭祀を担う祭祀組織である。組織の構成は表 1 に示したように、大きく女性神役と男性神役の集団に分かれる。西原では自治組織が祭祀組織に密接に関わっているため、表 1 には祭祀組織だけでなく、自治組織についても示した。

まず女性神役集団には、原則として西原出身者、西原在住者、西原に嫁いだ者が数え 46 歳になる年に加入する。加入と同時に神役に就任し、行動規制が伴う中、10 年間村落祭祀の担い手を務める事が義務づけられている。年齢階梯的に構成されるナナムイヌンマという女性神役の中から、ハナヌンマという名称の 5 人の神役を「神籤」という特別な籤引きによって選出する。ハナヌンマとは、祭祀組織の最高指導者となるウーンマという名称の神役を始めとし、ウーンマの次に地位の高いアークスンマという名称の神役、供物を管理するナカバイ、ウーンマやアークスンマの補佐を行うアークスンマヌトゥム、ウーンマヌトゥムという名称の神役で構成される小集団である。ウーンマとアークスンマの任期は 4 年から 5 年となっており、祭祀組織に加入し、ある程度神役としての経験を積んだ女性を

年齢階梯集団から選出する。これに対し、ナカバイ、アークスンマヌトゥム、ウーンマヌトゥムの任期はそれぞれ1年となっており、新たな女性加入者の中から毎年選出する。そのため、西原の祭祀組織は毎年最低でも3人の新規女性加入者を必要とする。女性神役集団には、村落祭祀の日取りを決定するヒューイトリヤという女性が含まれる。ヒューイトリヤは過去に女性神役を経験した女性から選ばれ、5年程度務める。ヒューイトリヤはすでに神役を退役している女性なのでハナムンマでもナナムイヌンマでもないものの、村落祭祀に参加し補佐的役割を担う時には、年長者として、ウーンマの次に地位が高くなることもある。

ナナムイ					
女性神役集団	ハナムンマ	ウーンマ	アークスンマ	ヒューイトリヤ	
		ナカバイ	アークスンマヌトゥム	ウーンマヌトゥム	
	ナナムイヌンマ	年齢階梯集団			
男性神役集団	ニガイウヤ ■健永会	年齢階梯集団			
自治組織					
字長	自治会長	議員	みどり会	■健永会	班長

表1 祭祀組織と自治組織の構成

次に男性神役集団は、原則として西原出身者、西原在住者、西原出身の女性と結婚し西原在住の男性が数え50歳になる年に加入する。加入者は男性神役として、7年間女性神役の補佐的役割を果たす。男性神役はニガイウヤと呼ばれる年齢階梯集団のみで構成されている。男性神役はナナムイに加入すると同時に、自治組織のうちの「健永会」の役員ともなる。男性神役は女性神役のような行動規制は特になく、年間45回以上の村落祭祀のうち、年6回のみ参加する。

また、西原の祭祀組織に密接に関わる自治組織は、字長、自治会長、議員、みどり会の成員、健永会の成員（ニガイウヤ＝男性神役）で構成されている。字長は自治組織全体の会長であり、自治会長とは「自治会」の会長である。自治会には、議員や班長も含まれる。西原には、東西南北に4つの支部があり、地域住民は居住地区によって各支部に所属する。班長とは、各支部の各家から選出された20代後半から30代前半の男性のことである。班長は毎年10人から15人程度選出され、自治組織の役員となる。「みどり会」とは、60歳で加入する地域の老人会である。班長、健永会、みどり会からはそれぞれ会長、副会長、会計が選出され、任期はいずれも1年となっている。

さらに、祭祀組織や自治組織の構成図には含まれないが、地域住民は世帯ごとに、村落祭祀にかかる費用を年間約5000円から1万円程度負担している。それ以外にも、住民は村

落祭りや供物の内容によって、その都度各家の成員1人あたり50円から300円程度を支払っている。年間で約45万円前後を回収し、全てハナムンマに支払う。これらは供物の準備や交通費として使用される。

### 2.3.村落祭祀

西原の村落祭祀は前半（春期）と後半（秋期）に分けて年間45回以上行われている。前半とは旧暦1月から6月までを、後半とは旧暦8月から12月までを示す<sup>5</sup>。日取りは、ヒューイトリヤ（日取り主）が暦やウーンマの干支を参考として「神々に祈願が届く最良の日」を決定する。毎年ヒューイトリヤが作成した「神行事日程表」をナナムイの成員や自治組織、公民館、小中学校、希望者に配布する。

村落祭祀 前半		村落祭祀 後半	
月	名称	月	名称
1月	①ヒューイ取り（日数取り）	9月	①ヒューイ取り（日数取り）
	②旧正月		②⑥ッサンサグムイヌウタキヌサウス （秋の籠りの御嶽の掃除）
	③ピースングムイヌウタキヌサウス （春の籠りの御嶽の掃除）		④ムッダミニガイ（麦鎮め願い）
2月	④ムッダミニガイ（麦鎮め願い）		⑤ウフユダミニガイ（大世鎮め願い）
	⑤ウフユダミニガイ（大世鎮め願い）		⑥ウカディダミグムイ（御風鎮め願い）
3月	⑥ウカディダミグムイ（御風鎮め願い）		10月
	⑦ンーダミハナダミニガイ（芋鎮め米鎮め願い）	⑦ユークイヌサウス（世乞いの掃除）	
	⑧ウチャナクニガイ（ウチャナク願い）	⑧ユークイ（世乞い）	
	⑨ンツガマニガイ（神酒願い）	⑨ンマユイ（母選り）	
	⑩ムラダミニガイ（村鎮め願い）	⑩ミヤークヅツ（宮古節）	
	⑪シートゥニガイ（生徒願い）	⑪ムラダミニガイ（村鎮め願い）	
4月	⑫ムスヌンニガイ（虫払い願い）	11月	⑫シートゥニガイ（生徒願い）
	⑬ウチャナクヌカサンブン （ウチャナクの重ね盆願い）	12月	⑬トゥマイニガイ（泊願い）
	⑭ムズヌウバツ（麦の御初）		⑭ンヌウバツ（芋の御初）
	⑮ヤナムヌハラスニガイ（悪霊払い願い）		⑮ンツガマニガイ（神酒願い）
	⑯フツムトニガイ（口元願い）		⑯カーヌカンニガイ（川の神願い）
	5月	⑰公民館ヌヤシキダミニガイ （公民館の敷地鎮め願い）	村落祭祀 その他
⑱学校ヌヤシキダミニガイ （学校の敷地鎮め願い）		不定期	
⑲公民館ヌウフユダミニガイ （公民館の大世鎮め願い）		⑲ウーンマヌトヌバン（大母の年の願い）	
⑳アヌウバツ（粟の御初）		⑳ウーンマヌムツジャウズニガイ （大母の持ち上げ上手願い）	
6月	㉑ヒューイヌウタキヌサウス （大日選りの御嶽の掃除）	㉑アグスヌマヌムツジャウズニガイ （神司の持ち上げ上手願い）	
	㉒ヒューイ（大日選り）	㉒ナカバイニガイ（中栄え願い）	
	㉓六月ニガイ（六月願い）	㉓ヤカズヤーカラヌニガイ	
	㉔ツマウサラ（村ウサラ）	その他	
7月	㉕公民館ヌフツバナヌニガイ （公民館の口払い願い）	⑳ムヌスの訪問	

図3 村落祭祀の日程一覧  
※1995年から2009年までの「神行事日程表」を参考で作成。

村落祭祀は図3に示したように、前半と後半に行う項目が全て決まっており、順序のみ毎年多少異なる。西原では、前半に行った村落祭祀を後半にも繰り返し行うという特徴がある。内容はまず農耕儀礼として、麦や芋、粟といった作物や神酒の豊作・豊穰祈願、作物の初穂を祝う儀礼、収穫祭、農作物の害虫を追い払う儀礼がある。次に、村落の豊穰祈願、大雨や台風などの災害から村を守るための安全祈願、悪霊や悪口を村落外に払う厄払い儀礼などがある。また、生徒の安全と健康を祈願する儀礼や学校、公民館などの敷地の祈願、航海安全と豊漁祈願、水の神々に感謝する祈願、海への祈願がある。他にも、分村の歴史と関わる儀礼などがある。さらに、全ての村落祭祀を開始するための儀礼、村落祭祀の前に御嶽を清掃し儀礼報告を行うための儀礼、神役が入学し卒業する儀礼などがある。しかし、実際の村落祭祀の場では住民の幸福、健康、富、安全をその都度祈願しているだけでなく、試験の合格や病気の回復祈願など個人的祈願も行われている。

村落祭祀は、先述した10カ所の御嶽と旧公民館に加え、近くの浜や港、川や井戸、小中学校、漁業組合の理事の家、広場、村の境、ウーンマの家でも行う。村落祭祀の開始時間や終了時間、所要時間は、儀礼の規模や内容によって異なるが、儀礼の過程で、線香に火を付け、神々に願いを述べるための時間帯が決まっている。それは、①ユーフフィ（午後7時頃）、②アキドラ（午前3時頃）、③カサンブン（午前4時半頃）、④クムイヌフツ（午前6時頃）の4つである<sup>6</sup>。これらの時間帯は、籠りを伴う儀礼と関わりが深く、村落祭祀の内容によっては①、②のみ祈願を行うこともあれば、③と④の祈願をハナヌンマのみで行うこともある。

南西諸島では、神前においては女性の方が男性より地位が高いといったような女性原理が働いており、村落祭祀の中心的な担い手はほとんどが女性である。また、御嶽には本来男性は入ってはならず、男性神役であっても、御嶽の中のイビという聖なる場には足を踏み入れてはならない。

西原の村落祭祀の中心的な担い手も女性である。女性神役は、一つの御嶽で、あるいは複数の御嶽を巡拝しながら神々への各種祈願を行う。まず御嶽を掃除し、供物を配置し、神々に祈る。御嶽では、神歌という神聖な歌を響かせる。春には一晩、秋には二晩、御嶽の中に泊まり込み祈願をする「籠り」も行われる。女性神役は10年という任期の中で、神々や御嶽の名称、使用する供物の種類や配置、神歌の旋律と踊りの手順、祈りや礼儀作法、方言などを体得する。これらの「知識」は、「10年御嶽に通ってもわからない」ほど、事細かく決められている。また、神役としての10年には、例えば御嶽での祈願がある時には葬儀への参加や墓へ行くことなどを憚るような、死に関する事柄への行動規制が伴う。

男性神役は、年6回のみ村落祭祀に参加し、男性神役同士で酒を飲み交わすなど、祈願

に直接的に関わることはない。しかし、7年という任期の中で、御嶽の位置や年に一度御嶽で歌う歌、方言での自己紹介や挨拶方法、神々への祈り方や礼儀作法などを体得していく。

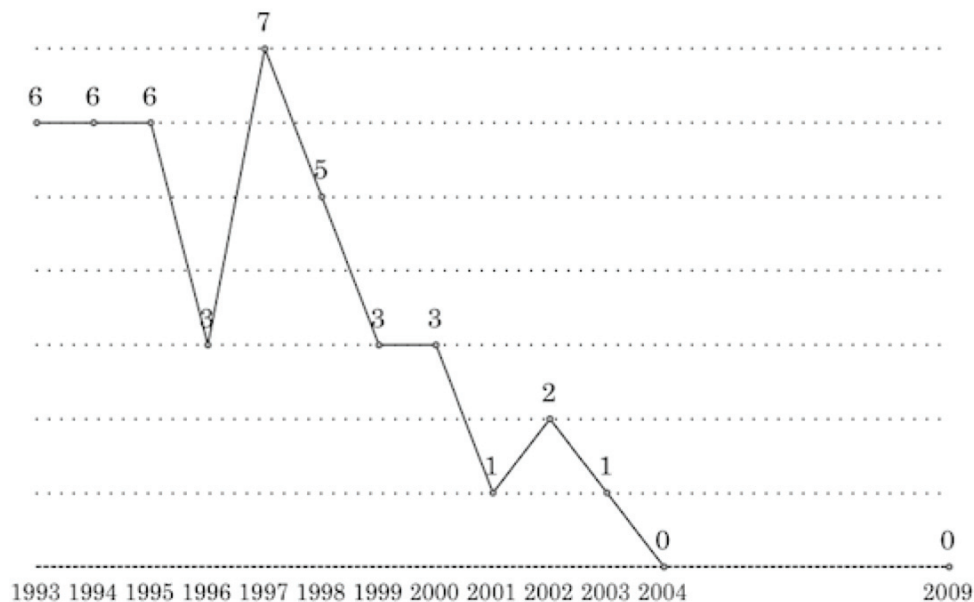


図4 女性加入者の推移

西原では2001年以降、女性の加入者の数が減少し、2004年以降2009年までは、新規加入がない状態が続いている。これは、人口流動や過疎化などによって候補者がいないため加入者数が減少しているのではなく、候補となる者はいながら、候補者が祭祀組織への加入を「拒否する」傾向にある。そのため、南西諸島の他地域と同様に、西原でも2000年以降、担い手不足により祭祀組織の維持と村落祭祀の継続が困難となっている。図4には、1993年から2009年1月までの加入者の推移を示した。図4を見ると、1993年から2000年に至るまでは毎年3人以上の加入があるが、2001年以降は正式な成員を欠いていることがわかる。さらに、2004年から2009年1月までの5年間は1人の加入もない状態が続いている。

これに対し、男性神役は2000年以降も毎年一定人数の加入がある。男性の加入者の中には、西原在住者に限らず、愛知県や神奈川県、東京都在住の西原出身者も含まれているという特徴がある。

### 3 ナナムイを守る

#### 3.1. 改変

南西諸島各地で神役が減少し村落祭祀の中断が生じている背景には、神前で行う事柄は



昔と全く同じ手順で、決して間違いがないよう行うべきだという根強い考え方—「始原遵守思考」—が大きく関わっている（島村 1998:108）。

それにも関わらず、西原では村落祭祀に関する事柄に改変を加えたり、祭祀組織の維持に関するアンケート調査を地域住民に実施するなど、さまざまな対応を試みることによって村落祭祀を存続させてきた（平井 2007a:363-365）。最初の大きな改変は、1960年代まで口頭でのみ伝承されてきた神々や村落祭祀に関する知識が文字化されたことである。1971年、口頭伝承の困難さを悟った当時の神役が、後代への伝承を助ける目的でノートに書き残し、現在に引き継いでいる（岡本 1971:1）<sup>7</sup>。1990年には、それまで新たに神役に就任した女性が購入していた神道具の費用を地域住民が負担することになった。1991年までは神道具の運搬や御嶽の巡拝など徒歩で移動していたが、一部の移動を車で行うようになった<sup>8</sup>。1992年には、ある神役から祭祀組織であるナナムイを「ナナムイ学園」と呼んではどうかという提案があった。それ以後、新たな加入者を「新入生」、退役する神役を「卒業生」、年齢階梯的に構成される神役を「学年」ごとに区分するなど、神役や組織の呼称も変化した。

他にも、家族や地域の関わり方にも改変が加えられてきた。女性神役は年間45回以上村落祭祀に参加するため、家族の協力が必要不可欠である。神々に関する事柄は日常生活の中でも何よりも優先されるため、神役は時に家族をも犠牲にする。家族は10年間にわたり神役としての母、妻、祖母を支えるだけでなく、特定の村落祭祀に参加することもある。このような家族の負担を考慮し、1998年から、例えば村落祭祀の時に弁当を用意し御嶽に届けるといった家族の役割を食堂に依頼するという形に変更した。さらに、新たに祭祀組織に加入した神役や退役を迎えた神役の大規模な祝賀会を家族の負担が大き過ぎるとして従来通り各家で行うのではなく、合同で行った。

2004年には、さらなる大規模な改変を行っている。改変の経緯は、2003年に神役候補となった女性の一人が、仕事のため土日しか自由な時間がなかったため、日程の変更を祭祀組織への加入条件としたことによる。自治組織や現役神役は何度も総会を重ね、暦や干支に関わらず、2004年の4月から全ての村落祭祀を土日に行うように変更した。次に日程変更に伴い、5つの籠りを廃止し、一日に2つの村落祭祀を並行することもあった。さらに、村落祭祀の全てを早朝から午前12時を過ぎる前には終わるようにした。

### 3.2. 変化

以上のように神役や自治会が意図的に行った「改変」とは別に、自然に、あるいはやむを得ず変わった「変化」がある。例を挙げると、かつてナナムイへの加入は地域住民にとって義務的な行為であり、神役を「拒否」という選択はなかったといえる。そのため、

まず変化した部分として、神役を拒否する女性が増加したことを挙げるができる<sup>9</sup>。女性神役の減少は、さらに多くの変化をもたらした。例えば、新規加入者が不足したことによる組織構成の変化、神役の役割を次の神役に引き継ぐための任期終了儀礼を行えないこと、不在神役の役割を代行すること、儀礼の遂行を円滑にするために、本来は決まった座順がありながら、隣同士詰めて座ることなどである。

神役個人の変化として、かつて村落祭祀の時には、緋の着物を着用するのが一般的であった。しかし1990年頃から、着物を洋服仕立てにした揃いの衣装を同窓生ごとに身につけるようになった。また、地域以外からの参加者の多い規模の大きい村落祭祀では、指輪やネックレス等、髪留めなどの装飾品を身につける神役が増加した<sup>10</sup>。衣装に関連して、御嶽以外の祝いの場においては、緋の着物ではなく、和装着物を「正装」として着用している。1890年代後半から1900年代前半頃までは、一般の人々が着用する服装はほとんどが縞柄の芭蕉衣であったが、日本本土より木綿の浴衣地が入るようになる。値段などが比較的安価であったことから、それ以後芭蕉衣を着る人は急激に少なくなった（平良市史編さん委員会編1989:200-201）。神役が特定の村落祭祀で着用する神衣装（白装束）も従来は芭蕉布で作られていたが、現在では木綿地で作られている。

次に供物の変化として、西原では神々に煙草を供え、その際に煙管を使用する。大正から昭和の初め頃は「きざみタバコ」を使用していたという記録などから（前掲1989:227）、現在使用する煙管はその名残であるといえる。また、地域で行っていた餅作りや神酒作りが廃止され、業者に依頼するようになった点、魚や蛸は本来近辺の海で採ったものを供えていたが、現在では外国産に頼っている点なども変化した。さらに言えば、現在では米や小麦粉で作るパンや麺などを主な主食とし、サトウキビの栽培を中心としながらも、芋だけでなく、ほとんど口にせず生産することすらない粟や麦の農耕儀礼を同じように行っているという点も、大きな変化であるといえる。

また、地域住民のナナムイに対する認識の変化として、以前は特定の村落祭祀で、白装束姿で神歌を歌いながら御嶽を巡拝する女性神役を見た者は「死ぬ」とまで言われていたが、神役の人数が減少したことによって、このような禁忌は薄れている。また、2000年頃までは、「五戸組」といって、両隣の家5戸を一組として、村落祭祀に使用する水や供物などを準備し御嶽に届ける役割があった。現在では五戸組は廃止され、字長と字長の妻、家族がその役割を担っている。またもしナナムイへの加入を拒むような女性には、両親や親戚、地域住民がこぞって加入を促す光景が当たり前であった。現在では、両親であっても娘にナナムイへの加入を強要することができなくなっており、地域全体で神役の拒否を容認しているのも一つの変化である。

地域住民以外のナナムイに関連する変化として、本来御嶽は個人的には入ることの許さ

れない神々の聖域でありながら、許可を得て入る者、無断で立ち入る者が増加していることも挙げられる。この中には、新聞社や写真家、研究者の他に、霊的職能者や観光客なども含まれている。

### 3.3. 変わらないもの

以上を踏まえ、西原の村落祭祀をめぐり、何が変わり何が変わらないのかを考えてみる。表2には「改変」した部分と「変化」した部分を区別し村落祭祀の項目ごとに示した。1990年から2009年にかけて行った改変には●印を、意図的な改変とは別に变化した部分、変化内容には△印を記した。そして、改変、変化の結果が2012年3月現在も定着している部分には◎印を記した。まず●印を記したのは、日程、時間帯、場所、籠り、一部の神役の任期と選出、継承、家族の役割に関する部分である。次に自然に変化した部分として△印を記したのは、日程、座順、役割、神歌、祭祀組織、衣装、行動規制、禁忌、継承、御嶽、地域に関わる部分である。さらに、改変、変化が現時点で定着している所として◎を記したのは、場所、座順、役割、衣装、行動規制、継承、地域の部分である。

表2に分類してみると、意図的に改変した後、そのまま定着したのは場所に関する項目（移動手段を車にした点）および、継承に関する項目（口頭伝承から記述による伝承にした点）であることがわかる。1971年、1990年代、2004年と様々な改変を加えてきたものの、ほとんどの改変が現在では元の状態に戻っている。それだけでなく、村落祭祀の構造とも関わる時間帯、内容、場所、供物、司祭者といった項目は一切改変されていない。日程は曜日や暦が改変されただけで、前半と後半という区分は変わっておらず、開始時間や所用時間等は改変しても、祈願の時間帯はそのままである。場所や座順、役割についても、ウーンマやハナヌンマなどの神役の地位にも変化は見られないことから、西原の村落祭祀にとって、改変されないこれらの部分が、「核」の部分になるといえる。一方で、村落祭祀の「核」に関わる項目以外は、わりと柔軟に変化している。

項目	正式	改変	変化	内容(年)	定着
日程	ヒューイトリヤ(日取り主)による決定	●	△	全てを土日に行う・異なる儀礼を同一日に行う・暦より曜日を優先(2004) △任期終了儀礼を行えない	
時間帯	夜更けから明け方にかけて行う儀礼 アキドラ・ユーフイ・カサンブ・クムイヌツ	●		全てを早朝から開始(2004)	
内容	農耕儀礼・村落の豊穡儀礼・村落の安全祈願儀礼・厄払い儀礼・掃除に関する儀礼・学校に関する儀礼・敷地に関する儀礼・川や海に関する儀礼・分村の歴史と関わる儀礼・村落祭祀を開始する儀礼など				
場所	Aウバルズ型/Bウタキ巡拝型(B1からB6)/Cその他	●		移動手段を徒歩から車に(1993)	◎
供物	儀礼ごとの配置				
座順	儀礼ごとの座順		△	△神役不在時は席をつめる	◎
司祭者	儀礼ごとの参加者				
役割	ウーンマ・アグスマ・ナカバイ・ウーンマストゥム・アグスマストゥム・ナナムイヌマ・ヒューイトリヤ・ニガイウヤ		△	△不在神役の役割を別の神役が代行	◎
線香	御嶽ごとの神々の分を読む 祈願の時間帯に分けて読む				
神歌	定まった手順で謡い踊る		△	△旋律などが異なる	
籠り	前半では一晩籠る 後半では二晩籠る	●		籠りの廃止(2004) ユークイのみ籠る(2004)	
祭祀組織	ハナムマ・ナナムイヌマ・ヒューイトリヤ・ニガイウヤ		△	△新規女性加入者の不在	
任期	ウーンマ4年から5年 アグスマ3年から4年  ナカバイ・ウーンマストゥム・アグスマストゥムは1年 ナナムイヌマ10年 ニガイウヤ7年	●		ウーンマの任期を3年に(2004) アグスマの任期を1年に(2004) ウーンマの任期を2年に(2005)	
選出	候補者が加入後に神籤を引く 新規加入者からナカバイ・アグスマストゥム・ウーンマストゥムを選出する ウーンマ・アグスマの選出ではナカバイ経験者は籤引きの候補から外す	●		候補者の加入前に行う(2004)  ナカバイ経験者がアグスマに就任(1992) ナカバイ経験者がウーンマに就任(2003)	
衣装	絣の着物を着用  特定の村落祭祀では神衣装を着用 ウーンマは常に神衣装を着用		△ △	△着物柄の洋服を着用 △アクセサリーの着用を認める	◎ ◎
行動規制	死などに関する穢れ ウーンマの行動規制		△	△緩和	◎
禁忌	ユークインマをじかに見てはならない		△	△緩和	
継承	口頭伝承	●	△	引き継ぎノートの誕生(1971) △ノートを見ながら村落祭祀を实践	◎
御嶽	許可なく立ち入らない 動植物には触れない		△	△カメラの使用を一部許可 △無断で立ち入る者の増加	
地域	ナナムイへの加入 村落祭祀の費用を負担		△	△女性加入者が不在(2000)	◎
家族	五戸組を形成し村落祭祀を手伝う 特定の村落祭祀で御嶽に重箱を届ける 新規加入者と退役者は各家で盛大に祝う	● ●	△	△五戸組の廃止 重箱を弁当制にする(1998) 祝賀会を合同で行う(1998)	◎

表2 改変と変化の比較表

### 3.4. 改変がもたらしたもの

本来、神前で行う事柄にはいかなる改変も加えてはならないという考え方がある。それにも関わらず、西原では、村落祭祀をめぐる事柄に改変を加えてきた。しかし、表2を見ても明らかなように、改変された部分の全てがすぐに定着したわけではない。それは、改変の度に、改変後に、かつての神役経験者や現役神役、地域住民からの強い反対があったためである。また、村落祭祀の改変に携わった自治組織の成員や神役間に起こる不幸や病氣、怪我、何らかのトラブルが、改変によって神々への禁忌を破ったためではないか、と解釈されたことにもよる。

例えば、3.1. で述べた祝賀会の合同開催は、結局再度各家で祝賀会をやり直すことになった。当時の神役は、後に「今までの派手な祝いを改善したい、合理化したいという多くの意見から合同祝いにしたものの、やはり先祖代々から受け継がれた風習をすぐに変えることは出来なかった」と述べている（赤嶺 2001:114）。2004年に変更された日程に関しても、2004年の後半からは全て本来の日程に戻されることになった。それは、「正式」な日に村落祭祀を行わなければ神々に祈りが届かないのではないかと、という神役経験者や現役神役からの強い不安感と、祈願の際に生じたトラブルが、日程を変更した事によって「神々に許されていないのではないかと」解釈されたためでもある（平井 2006:32）。そのため、神々の意志によって、一度変えた事柄をすぐさま「正式」な形に戻さなければならなかった。神前で行う事に「改変」を加えることは、「将来への吉・凶、幸・不幸への解釈にもつながるものであるから、可能な限り保守的の伝承が望まれる共同体の基本理念に関わる」ものである（山内 2003:90）。同時に、地域住民からは、改変を重ねた現在の村落祭祀は「正式」ではないという考え方もある。さらに、全ての改変は、その都度神々に直接確認をし、許しを得ながら行われてきた<sup>11</sup>。何かを改変する前には、どの部分をどれくらい変更するのか、全てを神々に説明し伝えるための「報告の儀礼」を行い、改変後には、許しを乞うための「お詫びの儀礼」も行ってきた。

つまり、西原では、本来神前で行うことにはいかなる改変も加えてはならないという根強い考え方がありながら、「改変」という神々へのタブーを犯すという苦渋の決断を繰り返すことによって、祭祀組織を維持してきた。それは、村落祭祀を中断させるよりは、形が変わっても継続させるという選択をしたためである。

### 3.5. 「正式」であるということ

ところで、「正式」な形を継承し、「伝統」を守り継いできたとされる西原の村落祭祀は、分村後から現在に至るまで、実際に変化なく行われてきたのであろうか。ここでは、まず

先述した、1971年に神役が記録したノートを参照し、村落祭祀の構造に関わる項目が実際に全く変化していないのかどうかを考えてみたい。このノートは「引継ぎノート」、あるいは「世継ぎ帳」として、代々の神役によって何度も書き加えられ、現在の形に至っている。現在継承されているノートには、村落祭祀の参加者、準備する物とかかる費用、供物配置、儀礼の手順、神歌の歌詞などが記してある。特に、どの神役がどの御嶽のどの神々を祀り、どの神に何を供えるのか、といった点は繰り返し繰り返し記述されている<sup>12</sup>。これに対し、1971年の記録は、供物配置、供え物をする神々の名称と供え方の手順のみを箇条書きしたものである。1971年の記録から一つの儀礼を取り上げ、2009年現在の供物配置と比較したのが図5と図6である（岡本 1971 : 15）。

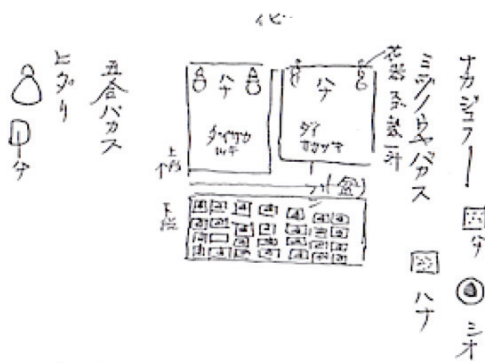


図5 1971年の供物配置

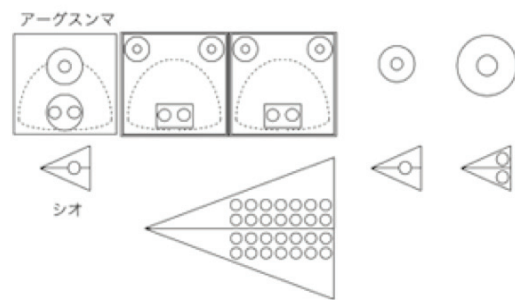


図6 2012年の供物配置

図を比較してみると、供える物に特に異なる点はない。ただし、現在ではナカジュフ（図6右上◎）という名称の神壺の下に米（ハナ）と塩（シオ）を芭蕉の葉一枚に供えているのに対し、1971年には米と塩を別々に小皿に供えるなど形式が多少異なっている。これは、1971年の他の供物配置にも同様に見られる形式である。つまり、供物の種類に相違はないものの、神道具の配置は少なからず異なっているといえる。

そもそも、現在の神道具を分村以後から同じように使用してきたとは考えにくい。それは、現在では神道具で使用する小さな神壺を「カミガマ」と呼称するのに対し、1971年の記録では全て「バカス」と表記していることにもよる。かつてバカスとは、「大きい酒器」のことを意味していた<sup>13</sup>。カミガマの「ガマ」とは宮古諸島の方言で、「小さいこと」を表す言葉でもあることから（与那覇 2003:128）、運搬等の理由から神道具が次第に小さくなっていった可能性もある。また、分村当時は神道具は大変高価なものであったため、かつては御嶽の植物、海辺の貝殻などを利用して供物を供えていた。現在でも浜辺の砂で香炉を作り線香を供えるのは、その名残であるといえる。

### 3.6. 「変えられない」 伝統

西原の村落祭祀に関する最古の記録は1971年のノートであるため、分村当時の様子を明らかにすることはできない。しかし、西原は池間と佐良浜から分村したという歴史的背景があり、神々も同様に祀っていると伝承されている。村落祭祀は「昔と同じように」行われてきたため、もし分村後から一切を変えず村落祭祀を行っているとしたら、それは直ちに分村元である池間と全く同じ村落祭祀を同様の手順で行っているということを意味する<sup>14</sup>。

月	名称	供物	場所	目的	類似
1月	初マビトダミニガイ	米、酒、塩	ウバルズ	健康祈願	
2月	ウフユダミ・ユージュミ	米、酒、塩	ウバルズ	豊作祈願	●
	ヒダカンニガイ	米、酒、塩 味噌、蛸、豚	ウバルズ	明治20年に始まった航海安全と豊漁に関する祈願	
3月	ウフユルス・ユージュミ	米、酒、塩	ウバルズ	粟の豊作祈願	○
	ウカディダミ・ユージュミ	米、酒、塩	ウバルズ	大風を防ぐための祈願	●
	ウハナダミ・ユージュミ	米、酒、塩	ウバルズ	木綿の豊作を祈願	○
4月	イビンスダミニガイ	米、酒、塩	ウバルズ	芋を植えたあとの豊作祈願	
	ムスヌヌ	米、酒、塩	浜	虫払い(鼠を舟に乗せて沖へ流す)	●
	シートガンニガイ	米、酒、塩	ウバルズ 漂着神 学校	村落の生徒の健康祈願	●
	ズヨシニガイ	米、酒、塩	ウバルズ	魚を寄せるための祈願	
	ジャグユシニガイ	米、酒、塩	ウバルズ	鯉釣りの餌を寄せるための祈願	
	カリウスダミニガイ	米、酒、塩	ウバルズ	人々の安全祈願	
	セイネンカイバヌニガイ	米、酒、塩	ウバルズ	大正10年に始まった、航海安全に関する祈願(個人が遭難した時も行う)	
5月	ムズヌウハツ	米、酒、塩	フズカサ の家	麦の豊作を感謝する祈願	●
	マミダミニガイ	米、酒、塩	ウバルズ	豆の豊作祈願	
	ナナバカスニガイ	米、酒、塩	ウバルズ	粟の豊作を佐良浜と共同で双方に願う	○
	ハナシツダミニガイ	米、酒、塩	ウバルズ	悪病を防ぐ祈願	
6月	フツビューイ	米、酒、塩	ウバルズ	収穫前の豊作祈願	●
	ウハツマイ	米、酒、塩	フズカサ の家	新米の収穫感謝祭	
7月	ウフユダミニガイ	米、酒、塩	ウバルズ	豊作祈願	●
8月	ウフユダミカサンバンニガイ	米、酒、塩	ウバルズ	重ねて祈願する(2晩籠る)	
	ウフユルスカサンバン	米、酒、塩	ウバルズ	二度目の粟の豊作祈願	
	ウカディダミカサンバン	米、酒、塩	ウバルズ	二度目の台風除け祈願	●
	アーナカンダミニガイ	米、酒、塩	ウバルズ	芋葛の豊作祈願	
9月	ユークイ	米、酒、塩	ウバルズ	豊作祈願	●
	ユークイヌ・ヤープトツ	米、酒、塩	ウバルズ	ユークイの家に祈る	
10月	ウハツ	米、酒、塩	フズカサ の家	芋の御初の感謝祭	○
	アーナカンダミ	米、酒、塩	ウバルズ	芋の豊作祈願	
	トマイガンニガイ	米、酒、塩	ウバルズ	ウバルズの前の昔の泊の祈願	○
11月	ムズダミニガイ	米、酒、塩	ウバルズ	麦の豊作祈願	●
	ハルシナダミニガイ	米、酒、塩	ウバルズ	かたつむりの発生予防祈願	
	ヒヤーズヌニガイ	米、酒、塩	ウバルズ	沖縄本島久米島から渡ってきた鍛冶の神、畑の神の願い	
	イラウバシヌニガイ	米、酒、塩	ウバルズ	池間と佐良浜の間の航海安全祈願	
	マビトダミニガイ	米、酒、塩	ウバルズ	村落の人々の健康祈願	
	スマフサラ(カウルガマ)	米、酒、塩、豚	ウバルズ	遭難者の漂着に伴う病疫防止祈願 豚を殺し骨を注連縄に八箇所縛る	●
12月	カーヌカンニガイ	米、酒、塩	ウバルズ	井戸の神への祈願	●

表3 池間の村落祭祀との類似点(項目のみ)

そこで、ここでは池間と西原で行う村落祭祀の項目を比較する。表3は、先行研究を参考に池間の村落祭祀をそれぞれ、儀礼を行う月、名称、供物、場所、目的別に分類したものである（野口 1972 : 222-243）。西原と同様だと思われる村落祭祀については●印を、同様かどうか検討する余地のあるものについては○印を示した。表3をみると、36項目ある村落祭祀のうち、村落祭祀の名称、目的などから西原と類似していると思われるのは、12項目であった。また、名称などは異なるものの、目的から類似しているかどうか検討の余地があるものは、5項目であった<sup>15</sup>。つまり、全てが全く同じであるとは言えないことがわかる。

実際、村落祭祀の行程に関しても、様々な差異が認められる。例えば、西原と異なる供物配置に、サカズキ（杯）の数がある。西原では、サカズキに泡盛を注ぎ、常に2つ一組で使用する。これに対し、池間では村落祭祀や里、家、個人単位の祈願において3つのサカズキを一組として使用するという特徴がある。3つのサカズキは図7に示したように、手前に2つ、奥に一つを丸い盆の上に置いて一組とする。これは竈石に由来し、手前の2つのうち右が屋敷神（火の神）、左が守護神、奥の一つが自然（太陽）神のサカズキを意味している（前泊 1996:12-13）。西原では現在このような知識は継承していない。

以上のように、簡単ではあるが西原と池間の村落祭祀を実際に比較してみた結果、異なっている部分も多いことがわかる。これらの変化は、時代変容や生活様式の変化に適応するために、自然に変化してきた部分であるといえる。つまり、儀礼を円滑に行うために変わってきた部分である。

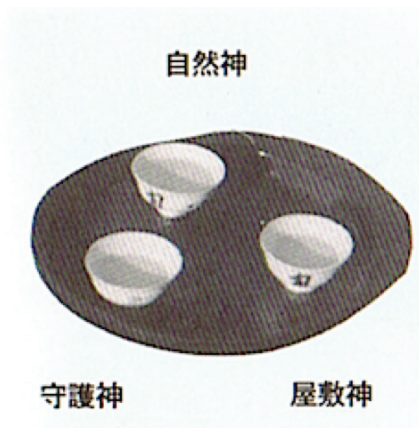


図7 池間の供物配置一例  
※前泊廣美『マークヅツ 初出親のための手引き(本)』より引用(前泊 1996:12-13)。

### 3.7. 守るべき「伝統」

本稿では、以上のような変化の要因を問うことを目的とはしていない。それはたとえ池間から分村し、同様にウパルズ御嶽や村落祭祀を引き継いだという伝承があっても、むしろ変化する方が当然の働きと考えるためである。そもそも、池間島と同様の形で西原の御嶽が祀られているわけではないのである。

現在使用している神道具の中には、戦後入ってきた物やかつては大変高価であったものも含まれるため、必ずしも全てがそのまま継続して使用されてきたとは言いきれないであろう。

また、西原で生じた変化は西原にのみ見出せる特徴というわけではなく、南西諸島の多くの地域でも同様に見られることでもある。例えば、西原のウパルズ御嶽には石の鳥居が



建っている。宮古諸島全域に 800 ヶ所以上存在するといわれる御嶽は、大正末期から国家神道の影響を受け、由緒ある御嶽ほど鳥居や石燈籠が立つなど外観は神社風に変容してきている（仲宗根 1992 : 529）。他にも、宮古諸島全域で行われていた、学校で行う「生徒のための祈願」は、宮古諸島で普通教育が始まり、一般子弟が教育を受けられるようになった 1882 年以後始まったものである（仲宗根 1992 : 529）。そのため、本稿では変化の中にあつて、変わらない部分に特に着目し、実際には変化している部分があつても、地域住民、および神役が「変わらず守ってきた」、あるいは「変化させてはならない」、「正式」な西原の「伝統」と捉えている点を重視した。芋や粟、麦を主食としなくても、現在でも芋や粟、麦の豊作を祈願しているのは、儀礼というものはただ形式的にのみ行われているわけではなく、前提には常に神々という存在があることを示す。植物や貝から次第に木製、あるいは陶器製の神道具が用いられるようになったのは、人々の生活道具が変化するにあたり、神々をもてなすためにも最良の、最上の道具を使用したい、といった心の表れでもあるといえる。それは、神前における着物が和装着物へと変化した点についても、同様にいえることである。つまり改変と保守の境界が明確であればあるほど、神々という存在が浮かび上がり、核の部分には、常に神々へのまなざしが注がれているといえる。

### 3.8. 公開と共有

以上のように、西原では村落祭祀の「核」の部分は厳密に保守しながらも、さまざまな事柄を改変し、変化させる形で村落祭祀を継続させてきた。神々や村落祭祀に関する事柄は、本来村落祭祀の場やナナムイの神役以外の繋がりでは、口にすることも憚られた。頻繁に御嶽に通う母に、家族が村落祭祀に関する事柄を尋ねても「あなたの知らない世界よ」と一言で片付けられる。神々に供えたお菓子や飲料を家に持ち帰ると、「お母さん、御嶽ってスーパーか？ 僕も行ってみたいな」と息子が言う（赤嶺 2001:105-106）。つまり、ナナムイとは同じ家に暮らす家族であつても決して明らかにされることのない「世界」であり、村落祭祀に関わる事柄の詳細、特に聖域や村落祭祀の場で神役同士のみで共有されてきた「核」の部分は、たとえ家族であつても秘儀として厳密に保持されてきた。しかし、祭祀組織への積極的な加入を見込めなくなるにつれて、今度は「核」を保守するために、村落祭祀に関わる事柄が外部に公開されていく。

2001 年、西原の御嶽や神役、村落祭祀の様子を写した写真集が販売された。写真集が出版された経緯は、1990 年代に入り村落祭祀をめぐる様々な事柄が変化する中、「ナナムイがなくなる前に記録として残して欲しい」という一部の神役の強い意志があつたためである。写真集が発売された後、日本内外から研究者や写真家、新聞社やテレビ局の取材者が訪れるようになる。それまで村落祭祀に関する事柄をほとんど知らなかった家族もまた、

地域住民や一般の人々と同様に、写真集やテレビなどのメディアを通して、西原の村落祭祀に関する知識を共有することになった。同時に、西原の村落祭祀の全てが明らかにされる事を不安視する声も高まった。その都度現役神役と神役経験者、自治組織は「どこまで見せても良いのか」、「取材をどこまで引き受けるか」を話し合った。全てを断った方が良いのか、記録のために一部は公開した方が良いのではないかと、時に神々にも直接問いかけ、その都度対応してきた。村落祭祀の最中にも、神役個人が外部者に対し、足を踏み入れて良い場所と良くない場所を示す光景が見られるようになったり、村落祭祀の開始時に、写真や映像を撮っても良い部分、撮ってはならない部分を明確に示すようにもなった。しかし、2006年、御嶽での祈願の様子がカラー写真でポスター化され、地域に配布されたことを神役たちが畏れ、一時的に全ての取材を断ったこともある。神役が減少しつつある2012年3月現在においては、取材者に直接注意を促す余裕がないという理由から、全ての取材を断っている。

また、2008年には、神歌を収録したCDが発売された。CDの発売については、神々に線香を供え、CDの発売の報告と許可を得るための祈願が行われた。収録された神歌も、御嶽の中で祈願中に行われるものは収録されず、一般の人が耳にしても良いと判断された神歌のみを収録している。このように、本来御嶽という聖域の中で実践され、ナナムイという祭祀組織の間でのみ共有してきた村落祭祀に関わる項目の一部が、公開されることになったのである。

さらに、祭祀組織の成員である神役個人によって、村落祭祀に関する事柄が公開されることもある。先述したように、祭祀組織への加入者が減少している女性神役に対し、男性神役は毎年一定以上の加入者の存在がある。加入者は、西原在住者に限らず、東京、愛知、沖縄本島在住の西原出身男性も含まれている。彼らの多くは、年に数回、飛行機を乗り継ぎ故郷である西原の村落祭祀に神役として参加している。神役としての個人的な実践の実態は、家族であっても語られることが少なく、ほとんど共有されないといえる。しかし、中には、東京を中心に西原の村落祭祀や祭祀組織に関する知識を公開するといった事例もある。2010年、ある男性神役が東京で結成した沖縄系コミュニティが発刊する雑誌を通して、西原の祭祀組織の存在や儀礼内容、儀礼で歌われる歌をCDとして付録にするなどし、広く紹介されることになる<sup>16</sup>。同コミュニティは、2011年には東京で開催された「宮古のまつり」において、西原の村落祭祀の一部を西原出身者ではない演者によって舞台上で演じるなどしている。つまり、本来は故郷の村落内でのみ私的に実践されてきた民俗宗教を、本土在住の沖縄県出身者が本土で一般に公開し、共有するための活動も広く行われるようになってきている。

#### 4 おわりに

以上のように、本研究では、宮古島の西原地域の祭祀組織を一つのコミュニティと捉え、コミュニティが生成され再編成される過程を所属する個々人の実践から論じてきた。

西原では祭祀組織を維持するために、村落祭祀に関する事柄に意図的に改変を加えてきた。このような改変は西原でのみ見られるものではなく、従来の研究でもすでに論じられてきたことである<sup>17</sup>。しかし、全てを「変化」として一括りに述べることはできず、「昔からあること」や「先祖の代から変わらないこと」と意識している風俗習慣が実は以前と全く異なるといったような「伝統文化の無意識的变化」と「伝統文化の意図的变化」は区別して論じる必要がある（渡邊 1992 : 32）。そこで本稿では、地域が主体となって能動的に変えた部分（改変）と受動的に変わった部分（変化）を区別するために、村落祭祀の項目を日程、時間帯、内容、場所、供物、座順、司祭者、役割、任期、行動規制などに分類した。また、1971年に使用されていた供物配置を記した記録と、現在の供物配置を比較しただけでなく、分村元である池間の村落祭祀の項目の比較から、変容過程についても示した。

結果、西原の村落祭祀は、改変された部分に加え、変化してきた部分も多いものの、村落祭祀の主要な部分と認識される部分＝「核」は明確に保守している点を明らかにした。また、「核」を保守するために、「核」の部分を守りながらも村落祭祀に関する項目を公開し共有する過程についても述べた。しかし、たとえ写真集や CD を通して一般に公開されたとしても、御嶽の中での時間、神々との連帯、神役としての個人的な体験は、やはり神役にのみ共有されるものである。そしてそれは家族であっても、「あなたの知らない世界よ」という言葉でのみ語られる、説明できない集まりであると言える。つまり、写真集や CD として第三者に説明可能な形で西原の祭祀組織が共有されるようになったからと言って、御嶽や村落祭祀への外部からの自由なアクセスが直ちに許可されたというわけではないといえる。

すでに述べたように、西原では 2001 年以降、祭祀組織への新規女性加入者が減少し、2004 年から 2009 年に至るまでは、一人の加入もなかった。これに対し、男性神役は毎年一定以上の入学があるだけでなく、1990 年代には成員を確保しながらも、村落祭祀の改変や変化を繰り返している。つまり、祭祀組織への成員確保は、組織を維持するための最低条件としてあり、コミュニティを維持するためには、誰が所属し、何を実践するのか、といった点が重要となってくるのがわかる。そこで本稿では、特にコミュニティに所属する個々の神役、あるいは関わりを持つ自治組織や地域住民の実践に着目してきた。

まず、祭祀組織の中で主要な位置を占めるのが女性神役である。女性神役は、10 年間にわたり、年間 45 回以上の村落祭祀を中心的に担うため、祭祀組織の維持には、女性神役の存在が必要不可欠となる。村落祭祀の改変のほとんどが、女性神役を対象に行われてきた

のもこのためである。これに対し、男性神役は地域住民以外にも県外からも加入があるなど毎年一定以上の成員を確保している。しかし、村落祭祀には年 6 回のみ参加をするなど、補佐的役割しか果たすことができない。神役は祭祀組織に加入することによって神々に関する知識を継承するものの、村落祭祀の「核」の部分は、同じ神役であっても男性には同じようには共有されていないといえる。例えば供物配置を例に挙げると、男性神役は供物が神々に供えられるべきものであるという認識はあるものの、使用されている供物の数や種類、配置や道具の名称といった詳細については全く把握していない。そのため、同じ組織の中でも、共有される知識は同じであるとは言えない部分がある。

次に、自治組織は村落祭祀に参加したり、「核」の部分共有したりするわけではないが、村落祭祀の改変に大きく関与していることがわかる。これは、自治組織が祭祀組織を通して共同体を維持し、村の「伝統的」な部分を保守したいと考えているからでもある。かつて、村落祭祀を担う女性神役は「共同体を公的に代表し、その繁栄を祈る」存在であった（高橋 1989:230-231）。神役の減少が加速したのは、神役への就任拒否を地域全体で容認してきたからでもある。しかし、祭祀組織が解体する中、村落祭祀を維持することができたのは、何より地域住民が儀礼にかかる諸々の費用を負担しているからであるといえる。

つまり、同じコミュニティに所属しながらも、女性神役が重視する神々への畏怖やタブー、東京在住の男性神役が重視する西原の一員としてのアイデンティティ、自治組織が重視する地域の「伝統」、地域住民の費用負担など、コミュニティの維持は、それぞれに異なる認識や実践が重層的に重なり合い、初めて可能であるといえる。

## 註

<sup>1</sup> 本稿では、コミュニティを「歴史的に構築される状況の産物であり、つねに変化している実践の活動領域」である「実践としてのコミュニティ」という視点で捉える（平井 a2012:2）。

<sup>2</sup> 本稿は 2009 年 3 月 31 日に立命館大学大学院文学研究科に提出した博士論文「南西諸島の村落祭祀の現状と民間信仰に関する考察-宮古諸島西原のナナムイを事例として-」の一部に加筆・修正を加えたものである。

<sup>3</sup> 2011 年 12 月末現在。統計みやこじま（平成 23 年度）。宮古島市統計字別住民基本台帳登録人口参照。

<sup>4</sup> 分村による土地の開墾と耕地の増加が目的であった（上原 1994:30-31）。池間から 73 戸、佐良浜からも 15 戸移住し、現在の西原にもともと居住していた 2 戸の合計 90 戸で創設されたとされている（仲間 1974:79-82）。

<sup>5</sup> 旧暦 7 月は、神々に関わる行事は行わない。

<sup>6</sup> () 内はだいたい時間帯を示すが、儀礼内容や不足の自体によっては 1、2 時間のズレが生じることもある。また、村落祭祀の内容によっては、アキドラやユーッフイの神願いを行いながらも、夕方に始まり午前 12 時前には終わる儀礼もある。

<sup>7</sup> 祥雲寺の岡本恵昭氏に特別に提供していただいた。

<sup>8</sup> 神役が定員に満たなくなった 2001 年以降、移動の際にはほんどの儀礼で移動の際に車を使用している。

<sup>9</sup> 本稿では神役間の改変と変化についてのみ述べているが、これらの変容の背景には、時代変容や生産基盤、経済活動、個人の価値観の変化も当然ある。

<sup>10</sup> 神々の前では髪を整え、アイロンを当てた着物を着用し、化粧をするなど「綺麗にして行く」必要があることから、現在では装飾品を身につけても良いことになっている。しかし、かつては西原では金は魔除

けの道具であり、神々をも「はじく」ことになるため、御嶽には着用してはならないという考え方もあった。

<sup>11</sup> 神々の意志はムヌスと呼ばれる霊的な能力で神々との対話を可能とする霊的職能者を通して神役に伝えられる。神役の中でもハナムヌマを中心に、改変の度にムヌスの家を訪問している。

<sup>12</sup> 特に、線香の本数と供える場所、火を付ける、付けないかといった点は、何ページにも及び書き加えられている。

<sup>13</sup> ノートを提供して下さった岡本氏によれば、1970年代の西原では、現在使用している神壺（カミガマ）より、大きな神壺を使用していたという。

<sup>14</sup> 分村後新たに行うようになった村落祭祀は除く。

<sup>15</sup> ただし、内容や供物、場所、司祭者別の十分な比較検討が今後必要である。

<sup>16</sup> ここでの沖縄系コミュニティとは、本土在住の沖縄県出身者が結成した各種団体を意味する。沖縄系コミュニティの会員には、本土在住の沖縄県出身者に限らず、本土出身者も含まれている。

<sup>17</sup> 祭祀体系の変化は、次の3つに分類されてきた。それは、①祭祀形態とその実践（様式の改変、祭祀場所の合祀、変更、参加者の規模および性質の変容）、②宗教者や神役組織（宗教者の類型化・関与、神役組織の継承、宗教者同士の葛藤・共存）、③神話や伝承世界の関与（系譜や伝説、宗教者や在地の人々の知識の所在や民俗倫理などの変化）であり、これらが複合的な問題として存在している（田中 2005：2）。

## 参考文献

赤嶺和子（2001）「ナナムイ賛歌-ナナムイヌンマ 10年の記憶」比嘉豊光『光るナナムイの神々 沖縄～宮古島～西原 1997～2001』風土社

安部幸（2000）「沖縄県伊良部島・佐良浜の祭祀組織 -社会構造の視点から-」『國學院大學紀要』 38 國學院大學

大越公平（1986）「村落祭祀の変容とその要因」『国立民族学博物館研究報告別冊』3 国立民族学博物館

上原孝三（1994）「消えた村人-西原分村にまつわる伝承から-」『地域と社会』18 ひるぎ社  
——（2001）「神はどこへ」川上哲也編『西原村立て125周年記念 んすむら』

——（2004）「宮古島の女神-祭祀歌謡から」佐々木伸一編『東アジアの女神信仰と女性生活』慶應義塾大学出版会

大山信義（2001）『コミュニティ社会学の転換』多賀出版

岡本恵昭（1971）「西原村の民俗資料」『神歌・祭祀研究』非売品

笠原政治（1991）「神役制の崩壊した村 - 伊平屋島・我喜屋の調査から」『南島史学』 37  
南島史学会

合田博子（2010）『宮座と当屋の環境人類学-祭祀組織が担う公共性の論理』風響社

島村恭則（1993）「民間巫者の神話的世界と村落祭祀体系の改変 -宮古島狩俣の事例-」『日本民俗学』194 日本民俗学会

高橋統一（1989）「ノロ祭祀の変遷」高橋統一編『総合研究奄美伝統文化の変容過程』国書刊行会

田中重好（2010）『地域から生まれる公共性：公共性と共同性の交点』ミネルヴァ書房

田中正隆（2005）「地域社会における祭祀の持続と変化をめぐる一考察 -トカラ列島の事例

- から-」『日本民俗学』242 日本民俗学会
- 田辺繁治 (2008) 『ケアのコミュニティ 北タイのエイズ自助グループが切り開くもの』岩波書店
- デランティ・G. (2006) 『コミュニティ』NTT 出版
- 仲間弘雅 (1974) 『西原創立百周年記念誌』西原創立百周年記念事業期成会
- 仲宗根将二 (1992) 「宮古の歴史と信仰」谷川健一『海と列島文化 第6巻 琉球孤の世界』小学館
- 野口武徳 (1972) 『沖縄池間島民俗誌』未来社
- 比嘉政夫 (1987) 『女性優位と男性原理 -沖縄の民俗社会構造』凱風社
- 平井芽阿里 (2006) 「村落祭祀の変容と伝承 -沖縄県宮古諸島西原を事例として-」『地域文化論叢』8 沖縄国際大学大学院
- (2007a) 「消えゆく村落祭祀-改変と保守という選択にみる継続の要因-」『次世代人文社会研究』3 韓日次世代學術 FORUM
- (2007b) 「村落祭祀継続の要因に関する一考察-なぜ神役であり続けるのか：宮古諸島西原の事例-」『比較民俗研究』21 比較民俗研究会
- 平井京之助編 (2012) 『実践としてのコミュニティ -移動・国家・運動』京都大学学術出版
- 平良市史編さん委員会編 (1989) 『平良市史第七巻資料編 5 民俗・歌謡』平良市教育委員会
- 前泊廣美 (1996) 『ミャークツツ 初出親のための手引き (本)』HOST・M企画
- 森田真也 (1995) 「神役と擬似的神役 -その正統性をめぐって-」『南島史学』45 南島史学会
- 山内健治 (2003) 「パティローマ島の変化と不変の三〇年 -社会構造を中心に-」『南島史学』62 南島史学会
- 与那覇ユヌス編 (2003) 『宮古スマフツ辞典』
- 渡邊欣雄 (1992) 「沖縄の文化変化 -生活の近代化と知識の変化の二〇年」『地理』37-5 古今書院

## 謝辞

この場をお借りして、これまで度重なる調査にご協力下さった西原の神々、神役、神役の家族、自治組織、地域住民の皆様にご心より厚く御礼を申し上げます。

2011 年度次世代研究「愛知・兵庫・神奈川の沖縄県出身者の家族とコミュニティに関する考察——多元主義的アプローチ」(研究代表：平井芽阿里) による成果である。

【メンバー】( ) 内は 2011 年度プロジェクト時点

平井 芽阿里 (京都大学大学院文学研究科グローバル COE 研究員)